

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子青戸中央保育園
施設所在地	葛飾区青戸4-24-20
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

光の不思議

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

音をテーマにした活動を行っていたところ花火や雷など音と光に関連性があるということに気が付いた児がいたため光をテーマに設定した。

2. 活動スケジュール

①グループ作り：3，4歳の異年齢で学びあいが発生するよう、3，4歳5～6人でグループを作成した。グループの名前を子どもたち自身で決めてもらい、グループに愛着がもてるようにした。

②光のイメージを絵に描く：

9/29：保育者が子どもたちに光について問いかけをした。「大きさは、色は？」などの問いかけ。子どもたちも光に関するイメージを共有することで、膨らませ、絵に描く。

③戸外探検：

10月中旬～下旬：戸外で、光や音を発するものを探す。また、プロジェクターで音と光に関連した映像を見る。(花火、雷、サイレン、プラネタリウムなど)。

11/5プラネタリウム見学。11/18:ライトで影絵、宝探し。11/26みらいワクワク館。

発見後、子どもたちが言葉にして伝え合う。家庭でも保護者と子どもの話が膨らむ。

④生活発表会：

発表会の際に、会場をライブ会場のようにライトアップしたいという子どもたちからの声。

12/8～発表会で使うスポットライトづくり。12/20：生活発表会。

⑤次年度に向けた活動：

4月以降、園でプラネタリウムを作りたいという声があがっている。それに向けて活動を継続。

12/24：光マジック実験キット。1月中旬：万華鏡づくり

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

※準備物・プロジェクターとビデオカメラ(身近な光を共有。子供たちが影絵を行う姿や発表会で照明をした様子をビデオカメラで撮影し投影) ・万華鏡キッド(光の役割を知る。)・懐中電灯(みらいワクワク館でスポットライトの不思議を知り、発表会の演出に使う)・カラーセロハン (懐中電灯に使用)、光マジック実験 (暗い所で光るペンでなぜ光るのかを考える)

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ①グループ作り：音の探求と同じく異年齢でのグループを作り活動。グループ名をつける。
- ②光のイメージを絵に描く：「ぴかぴかするとき音は聞こえる?」「みんなの周りがあるぴかぴかしてなに?」「光の色は?」「光の大きさは?」など問いかけ、グループごとに考える。発表後、絵で表現する。
- ③戸外探検：プロジェクターを使い、子どもたちが考えた音と光に関連した映像を見る(星も光だということを知る)。クイズも行い関心を深める。(光の方が音よりも早く伝わることに気がつく児がいた。)
11/5プラネタリウム見学(星も光だと再確認し保育室内にプラネタリウムを作りたいという声上がる)懐中電灯を使って影絵遊び(型抜きで好きな形を作っておく)や宝探しを行う。また、戸外で自分の影を見て長い時と短い時がある事を知る。3歳児は自分たちの影を撮影し発表会の背景に活用。11/26みらいワクワク館訪問(スポットライトの仕組みに関心を持ち発表会でライトを作りたいという意見が出る)
- ④：生活発表会：生活発表会で使うスポットライトづくり。生活発表会で照明の演出(3歳児)
- ⑤次年度に向けた活動；園プラネタリウム作りに向けた継続した活動の実施。光マジック実験、万華鏡作り

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

音の活動を進めていくうちに、音と光が互いに身近な存在だということに気が付いた子どもたち。散歩の際には踏切・パトカーなどのサイレン・信号など、音と光と一緒に出ているものを発見し興味を深めると、園外でも保育者と一緒に見つけてきた《びかびか》を保育者に知らせる姿が見られた。これらを踏まえ子どもたちが見つけてきたものをプロジェクターで共有し、さらに身近な音と光を探して発言し合った。発言が苦手な児も、3、4歳児混合のグループにしたことで互いに協力し合ったり保育者の援助を受け探究活動を進めることができた。保育者は常に全員に目を向け、一人一人の関心を見逃さないようにした。

万華鏡あそびを子どもたちがする中で、子どもたち自身で気づき、学びあうという姿勢が育まれた。

ペットボトル万華鏡を覗き、保育者が明るいほうで見るんだよと伝える。

こどもたちがぐるぐると回すと中の色が変わることを自分たちで見つける、他の子どもたちに教えあう。いい意味で保育者の予想を超えた活動として広がっていった。

ドキュメンテーションを定期的に発行することで保護者から子どもたちに家庭での活動の様子を伝えてもらうことを意図した。

星も光だという事に子どもたちが気が付いたことからプラネタリウム見学を行い、さらに光の不思議を体験できるみらいワクワク館への訪問を行った。プラネタリウム見学を行ったことから保育室内にプラネタリウムを作りたいという声が出て、みらいワクワク館への訪問をきっかけにライトの仕組みに興味を持ち発表会での演出につなげた。子どもたちの『やりたい』を実現することを通して、発言することや、自分のやりたいことを恥ずかしがらずに言える児が増えた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

○3、4歳児合同でグループを作ったため互いに助け合う姿が多くみられるようになった。また、発言の際、4歳児が助言したり寄り添う場面が見られるようになった。

○プロジェクターでピカピカ光るもの探しを行ったため自由なタイミングで発言したり、気づきを共有でき、一体感が生まれた。また、どんな発言にも間違いはないという保育者の声掛けをきっかけに引込み思案な児、自信のない児も発言する姿が見られた。

○ドキュメンテーションや送迎時の会話を通して保護者にも共有できたことで親子で光に関心を持ちプラネタリウムやみらいワクワク館に再度訪れる家庭もあった。保育園の取り組みが家庭内へも持ち込まれ親子で一緒に楽しむことができてよかった。なによりも、子どもたち自身の興味や疑問を時間をかけて探求することができてよい経験になった。年度内にプラネタリウムを完成させ、保護者や地域の方にもお声掛けし楽しみを共有できるようにしていきたい。